

## 上野先生、フェミニズムについてゼロから教えてください!

教科書を連想させるタイトルだが、敬遠することなかれ。親子ほどの年の離れた社会学者 上野千鶴子さんと漫画家 田房永子さんの対談は、「毒母」から、結婚、恋愛、子育て、性など「あるある」感満載の話題に及ぶ。なんなく感じていた女性の生きづらさにことばを与え、その要因をフェミニズム、女性学・ジェンダー研究の枠組みから紐解く対談は、軽快だ。

例えば、「世の中にはA面とB面があり、A面は男の社会で表の社会、B面はA面を裏で支える女の社会。間に厚い壁がある。女性や障害者は少しずつ壁に穴をあけ往来を試みるが、男性は苦労なく恩恵を享受している」という田房さんの経験から導き出されたモデルと上野さんの著書『家父長制と資本制』での「公私の分離モデル」との一一致には、思わず拍手。漫画で、難解に思える女性学・ジェンダー研究の論点を解説してくれるのも嬉しい。

後半では、若き東京大学生にも「おやじ」の兆候があるという話題や「おやじ」の再生産を断つにあたり女性ができることに論が及ぶ。その方法について意外に感じたのだが、本書でのフェミニズムの定義をみると腑に落ちた。気になる方は、ぜひお手に取ってみてください!

福岡県立大学 人間社会学部 准教授 佐野 麻由子さん

## 足をどかしてくれませんか。 —メディアは女たちの声を届けているか—

日本のメディアをみると、30年前とあまり変わらない表現があることに気づく。たとえば「女性の価値は若さ」と標榜するCMや、女性や性的少数者をいじめや嘲笑の対象とするバラエティ番組など数をあげればきりがない。特に2015年以降はジェンダー炎上する事例が頻発した。そのような最中の2017年、研究者、ジャーナリスト、エッセイストらがMeDi(メディア表現とダイバーシティを抜本的に検討する会)を立ち上げた。

この本は、MeDi設立の経緯や開催したシンポジウムの内容に触れながら、日本のマス・メディアが男性管理職によって支配され、女性たちの声が届かない状況をデータや理論、現場で働く女性たちの声を取り上げることを通じ明らかにしている。

しかし本書の白眉は、「金んだ女性」を描き続ける制作やメディアを責め、敵対するのではなく、「みんなが心地よく感じる表現は何だろうか?」と多様な人々と対話をしながら考え続けている点だろう。各章やコラムでは筆者それぞれが自らの生き方と働き方を振り返りながらメディアでの女性像を顧みている。#MeTooや#KuToo、フラワーデモもリアルな女性たちからの「声」だ。多様な人々が自由に議論する風土をメディアは作れるのか?

いや、作るのは「私たちみんなの声」だと気づかされた。

愛知工科大学 工学部 准教授 小林 直美さん



- 上野 千鶴子・  
田房 永子 著
- 大和書房
- 2020年初版
- 1,500円(税別)

### フェミニズム

一般に、「女権拡張論」「女性解放思想」と定義される。しかし、本書では、「フェミニズム」を「女が女であることを愛し、受け入れる思想」(182ページ)、「フェミニスト」を「自分の中にあるミソジニー(女嫌い)と闘い続けてきた人」(183ページ)と定義している。自分の外に「男」という敵をつくり闘うというよりは、自分の内に潜む「男性への過剰同一化」と闘い、「おやじ」の再生産を食い止める。そのような思想がフェミニズムなのだ。



- 林 香里 編
- 亜紀書房
- 2019年初版
- 1,500円(税別)

### エンダー炎上

メディアにおいてジェンダーにまつわる描き方が問題視され、SNS上で批判が集まる「エンダー炎上」という。

たとえば、女性蔑視や女性への暴力、ワンオペ育児などを表現したものに対して炎上が起きる理由は、昔ながらのジェンダー規範(「男らしさ」「女らしさ」)が描かれ、時代の変化が反映されていないことがある。その一因として制作者の多くが男性であることが指摘されている。女性も働くことが当たり前となり、男性も育児や家事を担うようになった視聴者と制作者との生活感覚のギャップが炎上の背景にあるとされている。

## NATIONAL GEOGRAPHIC 2019年 11月号 —まるごと一冊 女性たちの世紀—

『ナショナル ジオグラフィック』という雑誌をご存じだろうか。1888年1月、アメリカの首都ワシントンの社交クラブに集まった男性33人によって、ナショナル ジオグラフィック協会の設立が決められ、同年10月に創刊された会員誌がその始まりだといふ。

同協会の目的は名前のとおり「地理知識の普及と増進」であり、雑誌も現在は世界180カ国 840万人の知的好奇心を満足させるビジュアル雑誌へと成長した。同誌はその長い歴史の中で6000万点を超える写真コレクションを所蔵してきたが、残念ながら女性は撮られる対象でしかなく、写真家や編集者として主体的に関わりだすのは1970年代以降のことには過ぎない。その中で、「まるごと一冊 女性たちの世紀」と題した本号は、編集長、写真家や寄稿者のすべてが女性という異例の特集号となつた。それだけではなく同協会の雑誌やウェブは今後1年間にわたって、女性の暮らしや生き方に関するプロジェクトを続けて行くという。これもまた「#MeToo」の告発以降の、女性の言葉が発信される時代の流れと受け取って喜ぶべきだろうか。しかしながら、筆者の専門の美術家は登場しない。世界の変革にアートは必要なのだろうか。「日本版」でありながら、現代の日本人女性もまた登場しない。そこが日本の現状を象徴しているように見える。

美術史・美術批評・ジェンダー論 小勝 禮子さん



### 女性たちの世紀

特集のタイトルでもあるこの言葉は、20世紀以降、現在に至るまで、世界各地の女性たちがそれぞれの能力を發揮していかに社会を変えてきたかを伝えるものだ。政治家、法律家、人権活動家、海洋生物学者、文筆家、修道女、環境保護活動家、ファッショニエールのディレクター、女性兵士など。しかし残念ながら、筆者の専門の美術家は登場しない。世界の変革にアートは必要なのだろうか。「日本版」でありながら、現代の日本人女性もまた登場しない。そこが日本の現状を象徴しているように見える。

### &MORE 手に取りやすい一冊

## 主婦をサラリーマンにたとえたら 想像以上にヤバくなかった件

昭和女子大学 客員教授 白河 桃子さん

冒頭から大笑いです。例えば会社でみんなが忙しい時に、くつろぎながら「何か手伝う?」っていうメンバーがいたら腹立ちますよね? そう、これって「夫の態度に妻がムカつく」ポイントと同じ。主婦にとって家こそが「会社=働く場所」なので、夫が「お客様」「よそ者」感満載だと、こんな風に見えてくるんですよね。

ロールプレイという企業研修でよく使う手法があるので、例えば「上司」と「子どものいる部下」が立場を逆転させて会話してもらいます。そうすると、違う場所から気づくことがたくさんある。まさにそんなエッセイコミックです。作者は主夫で日本では約10万人(主婦は600万人)という貴重な存在!女性がやると当たり前の光景も、男性がやることで、「本来おかしくないか、これ」というツッコミポイントがこんなに多いんだなと、改めて思います。例えば「子育て中の女性が飲みに行くのは許可制でなぜ男性は許可がいらないのか」など。そんな主夫が「主婦をサラリーマンにたとえたら」というテーマを書いているのだから、面白くないわけないです。このツッコミポイントのことを「アンコンシャスバイアス」と呼びます。主婦はこう、女性はこう…というバイアスがかかっているので、「おかしいことがおかしいと思えない」のです。もし女性じゃなく男性だったら、もし家ではなく会社だったら…こういう視点で見ると、アンコンシャスバイアスの罠に気づくことができるのです。



- 河内 瞬 著
- 主婦の友社
- 2019年初版
- 1,200円(税別)